

家庭の食育と幼児の自尊感情の関連性

荒木みさこ*・山口 創**

The Relationship Between the Dietary Education in the Home to Parents of Infant and Self-Esteem of Children

Misako ARAKI* and Hagime YAMAGUCHI**

The purpose of this study is to investigate the relationship between the dietary education and children's self-esteem as well as to develop a measurement for the dietary education of parents in homes with infants.

In the preliminary investigation, we interviewed six people, nurse and parents, in order to understand the actual situation at home with regard to the children's dietary education and itemize different categories of measurement. As a result, we picked out 52 items.

In the principal investigation, we gathered data from 319 pairs of parents and children. Using factor analysis, we found three main factors: "Awareness of Dietary Education", "Implementation of Dietary Education", and "Proper Eating Habits Training for the Children". Moreover, we compared the children's self-esteem through their self-portraits with the three main factors as well as with their total score.

We found a significant difference between the self-esteem of children and Implementation of Dietary Education as well as the total point of the three main factors. Also, we found a quadratic relationship between the measurement of Dietary Education at home and the children's self-esteem.

key words: dietary-education, self-esteem, children

問 題

近年、「健康増進法」「健康日本21」「健やか親子21」といった健康増進施策が多く施行されている。中でも、2005年に制定された「食育基本法」をはじめ「保育所における食育に関する指針」「食からはじまる健やかガイド」や「栄養教諭制度」など法律の制定やガイドの作成により、食育という言葉を目にすることが多くなっている。食育という言葉は、石塚左玄の「食物養成法」で初めて使用され、その後、村井弦斎の食道楽という小説の中で食育論を取り上げている。これらの食育は現在の食育とは意味が異なり、栄養学的な観点を重視し代替療法的

な意味合いで使われている。現在の食育は食育基本法によると“生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの”と位置づけられている。栄養学者である足立・衛藤(2005)によると、“人間が人間らしく生きる・生活する資源としての食、同時に健康の資源でもある食を営む力を育てること、そしてこれらを現実可能な社会・環境を育てること”と報告している。また、食育基本法の基本理念から河野(2007)は食育を“食に関する感謝の念や理解、伝統的な食文化、環境と調和した生産等への配慮、農山漁村の活性化と食糧自給率の向上への貢献、食品の安全確保等を含む広範囲なものであり、食糧生産から消費にいたるまでの様々な体

* 桜美林大学大学院国際学研究科

Graduate School of International Studies, J. F. Oberlin University, 3758 Tokiwa-cho, Machida-shi, Tokyo 194-0294, Japan

** 桜美林大学心理・教育学系

J. F. Oberlin University, 3758 Tokiwa-cho, Machida-shi, Tokyo 194-0294, Japan

験活動を言う”と定義している。このように、食育に関与している分野は多岐にわたり、食育に関する定義・理念が幅広く、食に関する教育すべてが食育と位置づけられている。そのうえで、本研究においては、家庭において健全な心身を養うための行動およびその教育について扱うこととする。

ところで、食育の対象に関しても、妊産婦・乳幼児から老人にわたるまで幅が広い。内閣府(2007)によると、“食育はあらゆる世代の国民に必要なものであるが、子どもたちに対する食育は、心身の成長および人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性を育ていく基礎となるものである”と子どもに対する食育の重要性をうたっている。同様に足立ら(2005)は“次世代を担う子どもが「生きる力」を身につけるための適切な食育は、生涯にわたって健康な生活を送るうえで基本となり、望ましい食習慣を身につける第一歩である”と述べており、生涯にわたる生活習慣の基礎を育む子どもへの食育が特に大切であると考えられる。このように、現在までも子どもに対する食育が重要視され、多くの試みがされている。しかし、これまでの食育の取り組みは、幼稚園などの教育機関等での子どもに対する食育の実施が中心であり、日常の食行動を行う頻度が高い家庭(保護者の食育)を対象とした研究はあまりされていない。子どもの食行動にはいろいろな水準(新奇性恐怖、食物嗜好、食物摂取の調節)で養育者の行動が関与していることが明白である(長谷川, 2008)ことから、家庭に焦点を当てた食育の研究が必要であると考えられる。

これまでの食行動に関する研究は、長年何の栄養素をどれだけ摂取したかといった点が重視され、「食行動の背景にある心と身体との関連性」などを探求する視点はほとんど重視されてこなかった傾向にある(小松, 2001)。食行動と発達の関連性は、子どものときの食行動が健全であった者は、大人になったときに心理的に安定した性格特徴を持つことや(岡本・田口, 1996)、家族全員で会話のある食事をしている幼児は自制力があり・温和で安定しており(浜口・大喜多・福本, 2004)、家族で共食していると親子関係が良くなり、子どもの自尊感情が高くなる報告がされている(伊東・竹内・鈴木, 2007)。保護者の家事や育児のさまざまな側面は、

子どもの自尊感情に関連していると指摘されていることから(Sira & White, 2010)、日常の食生活に密に関係している家庭の食育と、幼児の自尊感情に何らかの関連性があることが想定される。

次に、幼児を対象とした場合の調査方法について述べる。これまでの幼児の食行動を対象とした研究の多くは他者評定によるもので、子どもの親や幼稚園教諭による評定が多く、日常からの認知やイメージから偏った見方をしてしまい、公平な評定が難しいことが示唆される。幼児自身が尺度やインタビューに回答するのが一番良い方法であると考えられるが、質問項目を正しく認識して回答することが困難であり、信頼性妥当性に欠くことが想定される。臨床場面において、幼児自身を対象にアセスメントを行う場合、絵画など視覚的媒体を用いることが多い(早川, 2002)。なかでも人物像を描出するという方法は、小林・前川(1993)によると「子どもは自発的に同性の自己像と考えられる人物を描出する」と報告しているように、日常で自分自身の絵を描くことが多く、幼児にとっても比較的容易である。自尊感情と人物画の大きさについての研究はこれまで多くの研究がされており(e.g., Swensen, 1968; Delatte & Hendrickson, 1982)、さまざまな解釈が提唱されている。Machover(1949)を代表として提唱されている説では、人物画の大きさと自尊感情の間には正の相関があり、人物画の大きさが大きいほど自尊感情も高いとされている。対象年齢は人物像を描くことができる3歳から9歳程度とされている。

目 的

本研究では幼児の家庭の食育(以下、“家庭の食育”とする)に焦点をおき、予備調査で項目収集を行い、家庭の食育を測定する食育尺度の開発を行うこと。その後、家庭での食育が子どもの自尊感情にどのような影響を及ぼしているか、検討することを目的とした。

方 法

家庭の食育尺度作成のための予備調査

予備調査期間 2009年6月から7月にかけて調査を行った。

予備調査対象者 幼稚園児の食事を作っており

面接者と面識がない保護者6名と、幅広く幼児の食育を捕らえるために、幼児と密に関わり保護者の悩みなどにも対応すると想定される幼稚園教諭1名を機縁法にて抽出した。

予備調査方法 場所は対象者の自宅および喫茶店にて面接を行った。面接はすべて筆者が行い、調査的面接の技法(鈴木, 2002)を参考にあらかじめ作成しておいた面接ガイドラインと質問項目(例えば, “食生活で心がけていることは何か” “食事時のルールはあるか” など)に沿って半構造化面接で行った。研究趣旨と倫理的配慮を説明し調査協力の同意を得た後、面接中のメモと音声録音の許可を取り音声を録音した。

予備調査分析方法 メモと録音したテープの情報を書き起こし、心理学を専攻する教員・大学院生・大学生の計4名による2回のブレインストーミングを行った。面接から抽出された106項目をカード化し、質問項目として不適切だと判断された項目を除き、内容が重複していると考えられた項目をまとめたところ、最終的に52項目が選出された。

本調査

調査期間 2009年9月から2010年10月にかけて調査を行った。

被対象者 全日本私立幼稚園連合会・東京都私立幼稚園連合会を通して紹介された幼稚園に調査趣旨を説明し、調査に同意が得られた東京都内の私立幼稚園5園を対象幼稚園とした。各幼稚園の幼児(3～5歳)と、その幼児の食事を作る保護者を対象とした。配布数は751組で、最終的に配布した調査用紙が回収できた319組(回収率: 42%)の親子を対象者とした。

質問紙構成 保護者用: 予備調査で得られた52項目を質問項目に書き換え、内閣府が作成したパンフレット“食育の推進に向けて”を参考に、食育に関して必要だと想定された6項目を加えた58項目で構成された。

幼児用: 人物画を描くためのB4の画用紙。

調査方法: 調査は留置法で行った。調査依頼文・調査用紙・画用紙を封筒に入れた状態で各クラスごとに園児に配布し、回収は配布した封筒に封をした状態で園児を通して回収した。

人物画描画の教示と手順 本研究で調査した人物画は、幼児自身の自画像であった。人物画(以

下: 自画像)の描画手順は、保護者が「自分の絵を、頭から足の先まで全部描いてください」と子どもに教示をした後、子どもに鉛筆で自画像を描いてもらった。子どもが「描き終わった」と自己申告した時点で、保護者に画用紙を回収させた。

自画像の分析方法 幼児の自画像は、縦の長さについて定規を使用しcmで算出し、面積は半透明の方眼用紙をあててcm²で算出した。

研究倫理

本研究は桜美林大学研究倫理委員会において、倫理審査を受け、承認を得てから面接及び調査を行った(第09021号)。予備調査の対象には、面接前に研究趣旨を説明し、協力は自由意志に基づくこと、協力しなくても不利益になることはないこと、匿名化しID番号で管理すること、個人の機密が漏洩しないように十分に配慮することなどを、文章と口頭にて説明し参加意思の確認を行った。本調査の対象には、調査依頼文・調査用紙に予備調査とほぼ同様の内容を明記した。また、調査は留置法で行ったため、個人情報保護のために封筒に調査用紙を入れた状態で回収し、回答をもって調査の同意とみなした。

結 果

家庭の食育尺度開発 幼児のいる家庭での食育に関する質問の回答に対し、最尤法Promax回転による探索的因子分析を行った。多重因子パターンを削除した結果、最終的に解釈可能な3因子21項目が抽出された。第1因子は、“料理を作るのに、手を抜いていると感じる(R)” “食育は大切だと思うが、実践できない(R)”などの、食育の理想と現実のギャップや食事を作ることの負担などの、食育に対する理想意識が抽出され「食育意識」と命名した。第2因子は、“食は子どもの心の発達に影響を与えると思う”などの食育への理解、教育に関する項目が抽出され「食育実践」と命名した。第3因子は、“子どもが食事中に立ち歩く” “子どもが「いただきます」「ごちそうさま」といった食事時の挨拶をしている”などの子どもの行動や食事の規則性に関する項目が抽出され「食事に関する子どもの様子」と命名した。Pearsonの積率相関係数を用いて因子間相関を算出したところ、食育意識と食育実践

Table 1 家庭の食育尺度の因子分析結果

下位尺度	因子パターン		
	I	II	III
第1因子：「食育意識因子」($\alpha=.84$)			
52 料理を作るのに、手を抜いていると感じる (R)	-.93	.18	.08
57 料理が嫌いだと感じる (R)	-.65	-.01	.13
42 同じメニューの繰り返しで変化が乏しいと思う (R)	-.63	-.01	.08
56 自分が作ったもののおいしいと感じない (R)	-.60	.04	.02
55 献立を考えるのが大変 (R)	-.57	.03	.02
2 食育は大切だと思うが、実践できない (R)	-.53	-.03	-.05
46 主食・主菜・副菜をそろえる	.51	.08	.19
11 食育の理想はあるが、現実とは差がある (R)	-.51	.01	-.12
4 手作り料理を心がけている	.49	.23	.07
35 主食が米ではなく、小麦粉から作られる ^{めん} 麺や小麦粉中心である (R)	-.45	.12	-.02
第2因子：「食育実践因子」($\alpha=.81$)			
30 子供に食材を触らせる	.13	.69	-.01
12 子供に食べ物の旬を伝える	-.08	.63	.09
31 ネットやテレビで食に関する情報を得ている	.04	.58	-.10
40 友人・家族と食に関する話をする	-.17	.58	-.12
38 食は子どもの心の発達に影響を与えようと思う	.00	.51	.08
28 保護者が調理をしていると、子供が興味を示すことがある	-.09	.47	-.13
3 子どもに身体と食べ物に関連性を伝える	-.05	.46	.11
37 食前に子どもが手洗い・うがいをする	.21	.45	.19
45 子どもの食について学ぶ機会がある	-.09	.45	-.27
29 食育を家庭で熱心に行っていると感じる	-.29	.43	.05
39 子どもと買い物と一緒に買って食品を選ぶ	.12	.43	.11
20 食の安全性が気になる	.14	.43	.07
第3因子：「食事に関する子どもの躰因子」($\alpha=.75$)			
5 子どもが食事中に立ち歩く (R)	-.04	.15	-.71
9 子どもが食後に歯磨きをしている	.22	-.01	.51
1 子どもが「いただきます」「ごちそうさま」といった食事時の挨拶をしている	.06	.09	.50
43 子どもがお菓子ばかり食べて、食事をあまり食べない (R)	.23	.05	-.49
32 食事中、子どもが姿勢を正して座るように気をつけている	.08	.15	.48
51 夕食は決まった時間に食べる	-.25	-.02	.47
7 子どもが食べる事に集中して食べる	-.19	.02	.45
48 朝食は決まった時間に食べる	-.10	.01	.44
寄与率 (%)	21.13	5.74	5.92
累積寄与率 (%)	21.13	26.87	32.79
因子間相関			
I	1.00		
II	.54	1.00	
III	.39	1.00	
合計	.80	.74	.64
合計信頼性係数			$\alpha=.87$

では $r=.54$ と中程度の正の相関があり、食育意識と食事に関する子どもの躰では $r=.39$ と弱い正の相関があり、食育実践と食事に関する子どもの躰では $r=.33$ と弱い正の相関であった。食育意識と合計得点では $r=.80$ で強い正の相関があり、食育実践と合

計得点では $r=.74$ で強い正の相関があり、食事に関する子どもの躰と合計得点では $r=.64$ で中程度の正の相関であった。Cronbachの α 係数は、第1因子は $\alpha=.84$ であり、第2因子は $\alpha=.81$ であり、第3因子は $\alpha=.75$ であり、3因子の合計は $\alpha=.87$ であった

Table 2 家族の食育尺度の違いを自尊感情（自画像の長さ）の比較検討

		N	平均	SD	有意確率 多重比較 (Tukey の HSD)
食育意識	高群	21	28.30	6.82	(F(2, 121) = 2.01, n.s.)
	中群	88	23.93	7.71	
	低群	15	24.51	8.79	
食育実践	高群	21	28.87	6.86	(F(2, 121) = 4.14, $p < .05$) 高群 > 中群 [†] ・高群 > 低群 [*]
	中群	91	23.83	7.90	
	低群	12	22.52	7.23	
食事に关する子どもの関	高群	23	27.00	7.52	(F(2, 121) = 2.15, n.s.)
	中群	88	23.63	7.58	
	低群	13	26.48	9.60	
合計得点	高群	23	28.47	6.48	(F(2, 121) = 3.53, $p < .05$) 高群 > 中群 [*]
	中群	91	23.66	8.03	
	低群	11	24.77	7.72	

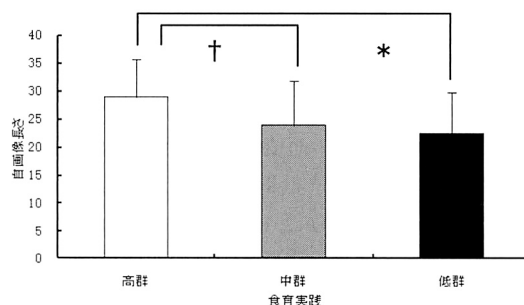
Table 3 家族の食育尺度の違いと自尊感情（自画像の面積）の比較検討

		N	平均	SD	有意確率 多重比較 (Tukey の HSD)
食育意識	高群	21	199.07	121.63	(F(2, 121) = 2.01, n.s.)
	中群	88	181.44	113.58	
	低群	15	184.34	128.13	
食育実践	高群	21	230.67	114.48	(F(2, 121) = 2.39, $p < .10$) 高群 > 中群 [†]
	中群	91	171.27	110.25	
	低群	12	199.54	148.42	
食事に关する子どもの関	高群	23	201.92	108.04	(F(2, 121) = 1.17, n.s.)
	中群	88	174.26	117.05	
	低群	13	218.85	122.98	
合計得点	高群	23	212.81	114.71	(F(2, 121) = 1.18, n.s.)
	中群	91	176.52	115.54	
	低群	11	213.86	150.97	

(Table 1)。

食育と幼児の自尊感情（自画像）の関連性の検討
 家庭の食育尺度の各因子得点と合計得点を、それぞれ平均+1SD以上を高群・平均±1SD以内を中群・平均-1SD以下を低群に分け独立変数とし、子どもの自尊感情（描出した自画像の長さ、面積）を従属変数とした一元配置分散分析を行った (Table 2, 3)。多重比較は Tukey の HSD 法を用いた。以下、有意差の見られた結果のみ記述する。

食育実践と自画像の長さは、高群=28.87±6.86、中群=23.83±7.90、低群=22.52±7.23であり、有意差が見られた ($F(2, 121) = 4.14, p < .05$)。多重比較を行ったところ、高群と中群の間に有意傾向があり ($p < .10$)、高群と低群の間に有意差があり ($p < .05$)、


Figure 1 食育実践と自尊感情（自画像の長さ）の比較検討

高群は中群に比べ有意傾向に、低群に比べ有意に自尊感情が高かった (Figure 1)。

合計得点と自画像の長さは、高群=28.47±6.48、

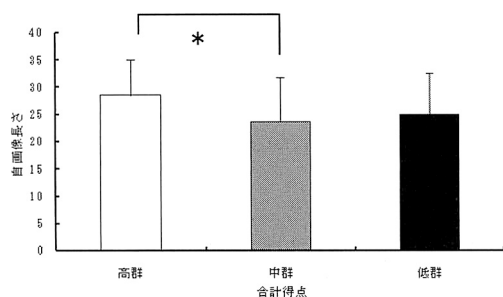


Figure 2 合計得点と自尊感情（自画像の長さ）の比較検討

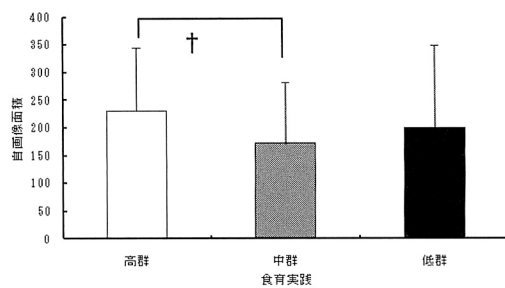


Figure 3 合計得点と自尊感情（自画像の面積）の比較検討

Table 4 家庭の食育尺度と自尊感情（自画像の長さ・面積）の相関関係

	食育意識	食育実践	食事に関する 子どもの躰	家庭内の 食育合計得点
自画像の長さ	.12 <i>n.s.</i>	.19 <i>n.s.</i>	.09 <i>n.s.</i>	.18 <i>n.s.</i>
自画像の面積	.13 <i>n.s.</i>	.02 <i>n.s.</i>	.00 <i>n.s.</i>	.07 <i>n.s.</i>

Table 5 家庭の食育尺度と自尊感情（自画像の長さ）の2次相関

	自画像の長さ			自画像の面積		
	R^2	F 値		R^2	F 値	
食育意識	.04	2.30	<i>n.s.</i>	.00	.15	<i>n.s.</i>
食育実践	.06	4.22	*	.03	2.21	<i>n.s.</i>
食事に関する子どもの躰	.05	3.28	*	.03	2.19	<i>n.s.</i>
合計得点	.07	4.51	*	.04	2.36	†

中群=23.66±8.03, 低群=24.77±7.72であり, 有意差が見られた ($F(2, 122)=3.53, p<.05$)。多重比較を行ったところ, 高群と中群の間に有意差があり ($p<.05$), 高群は中群に比べ有意に自尊感情が高かった (Figure 2)。

食育実践と自画像の面積は, 高群=230.67±114.48, 中群=171.27±110.25, 低群=199.54±148.42であり, 有意傾向が見られた ($F(2, 121)=2.39, p<.10$)。多重比較を行ったところ, 高群と中群の間に有意傾向があり ($p<.10$), 高群は中群に比べ有意傾向に自尊感情が高かった (Figure 3)。

相関係数による検討 家庭の食育尺度の各因子得点と合計得点を自尊感情（自画像の長さ・面積）について, Pearsonの積率相関係数を算出したところ, $r=.00\sim.19$ の値をとっており, どの項目においても相関関係は見られなかった (Table 4)。

どの因子も散布図の分布をみると, 曲線を描く形での相関関係が示唆されたため, 2次相関の算出を行った。2次相関（2次関数）とは, 相関係数や重回帰分析のようにグラフに表すと直線ではなく, ある鉛直な直線（対称軸）に関して対称な放物線の滑らかな曲線を描き, その対称軸は放物線と放物線の頂点で交わる関数のことある。以下, 有意な相関が見られたもののみ記載する。

食育実践と自尊感情（説明変数を自画像長さ, 基準変数を食育実践とする）において有意な2次相関が見られた ($R^2=.06, F(2, 122)=4.22, p<.05$) (Table 5)。

食事に関する子どもの躰（説明変数を自画像の長さ, 基準変数を食事に関する子どもの躰とする）において有意な2次相関が見られた ($R^2=.05, F(2, 122)=3.28, p<.05$)。

合計得点と自尊感情（説明変数を自画像の長さ、基準変数を合計得点とする）において有意な2次相関が見られた ($R^2=.07, F(2, 122)=4.51, p<.05$)。

合計得点と自尊感情（説明変数を自画像の面積、基準変数を合計得点とする）において有意傾向で2次相関が見られた ($R^2=.04, F(2, 122)=2.36, p<.10$)。

考 察

本研究の目的は、家庭の食育尺度開発と食育が子どもの自尊感情にどのような影響を及ぼしているかを検討することであった。

因子分析の結果、“食育意識”“食育実践”“食事に関する子どもの躰”の3因子が抽出された。予備調査の面接を元に質問項目を作成し、さらに参考資料から調査趣旨に沿った質問項目を加えたことから内容的妥当性が得られ、因子分析によって構成概念妥当性が得られた。下位項目を見ると、本尺度は“食育実践”といった子どもへの食育の働きかけだけでなく、実際に食育を行う保護者自身の意識や子どもの行動といった、側面から多角的に測定できる尺度であると解釈された。 α 係数が.75～.87の範囲をとっていたことから内的整合性での信頼性が得られた。これらのことから、本尺度は妥当性と信頼性の面から十分に使用可能であることが言えた。因子間相関は、食育の意識が高い傾向にあると、食育を実践しており、食事に関する子どもの躰がされている傾向であった。また、食育を実践している傾向にあると、食事に関する子どもの躰がされている傾向にあった。これらのことから、保護者の食育意識が高いと食育の実践につながり、食事に関する子どもの躰も向上する可能性が示唆され、保護者に対する食育の重要性が示唆された。

また本研究では、人物画の大きさと自尊感情の間には正の相関があり、人物画の大きさが大きいほど自尊感情も高いとされている先行研究を支持して分析を行った(Machover, 1949)。自尊感情との比較検討では、食育尺度の高群は中・低程度の群に比べ、有意に子どもの自尊感情が高かった。同様に合計得点と自尊感情（自画像の長さ）において、高群は中群に比べて、有意に子どもの自尊感情が高かった。食育意識と食事に関する子どもの躰では、有意な差は見られなかった。これらのことから、家族で共食していると親子関係が良くなり子どもの自尊感

情が高くなると報告があるように(伊東ら, 2007)、家庭の食育といった子どもへのより良い食生活の働きかけは、子どもの自尊感情に影響を及ぼすことが本研究でも支持された。

食育と自尊感情とで2次相関の算出を行った結果、食育実践と自尊感情、食事に関する子どもの躰と自尊感情、家庭の食育合計得点と自尊感情との間に2次相関の関係性が見られた。これらの結果は、食育は本研究で用いた食育尺度合計得点であれば126点程度までは効果が見られないが、緩やかなカーブを描き上昇する傾向にあると解釈できる。食育はすぐに子どもの性格に影響を及ぼすものではなく、長期的に取り組む必要があると示唆される。今回用いた尺度によると、一定以上の食育が求められ、それを越えると結果として子どもの自尊感情が高くなる傾向であることが考えられた。

食育と心身の発達に関連してさまざまな文書（たとえば食育基本法・食育白書など）で記述されているが、本研究において特に食育と自尊感情に重要な関連があることがうかがえた。この結果をもとに、家庭において食育を促進させるため、保護者の食育意識を変容させ食育実践・食事に関する子どもの躰を向上させる試みなどから、間接的に子どもの自尊感情の発達に貢献できる可能性が考えられた。しかし本研究において、保護者が家庭において食育を行う背景にある要因など、明らかにされていない部分も多い。今後は、その背景を探るとともに、保護者に対する家庭の食育促進のための介入といった側面からさらなる研究を行う必要があると示唆された。

謝 辞

本研究にご協力くださった全日本私立幼稚園連合会・東京都私立幼稚園連合会の皆様、桜美林幼稚園・久我山幼稚園・五ノ神幼稚園・調布若竹幼稚園・東一の江幼稚園の幼稚園・町田自然幼稚園の保護者の方々、快く調査許可をくださいました園長先生をはじめとする諸先生方に、深く感謝申し上げます。

引用文献

- 足立己幸・衛藤久美 2005 食育に期待されること 栄養学雑誌 63, 201-212.
- Delatte, J. G., Hendrickson, N. J. 1982 Human Figure drawing size as a measure of self-esteem. *Journal of personality Assessment*, 46(6), 603-606.

- 浜口郁枝・大喜多祥子・福本タミ子 2004 母親の食生活意識が幼児の性格形成に及ぼす影響 大谷女子短期大学紀要 **48**, 1-14.
- 長谷川智子 2008 食行動の発達心理学的研究の展望 (1) Birch らの乳幼児期の食物嗜好と食物摂取の調節に関する研究 大正大学大学院研究論集 **32**, 404-424.
- 早川 淳 2002 母子相談の事例から 畠中宗一(編) 母子臨床再考 現代のエスプリ 至文堂 **420**, 81-92.
- 伊東暁子・竹内美香・鈴木晶夫 2007 幼少期の食事経験が青年期の食習慣および親子関係に及ぼす影響 健康心理学研究 **20**(1), 21-31.
- 小林重雄・前川久男 1993 グッドイナフ DAM (draw-a-man) 検査—人物画知能検査— 上里一郎(監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 75-83.
- 小松啓子 2001 子どもの生きる力を育てる連続的な食生活体験の意義—幼児期の食行動の自立をとおして— 日本生活体験学習学会誌 創刊号, 19-27.
- 河野公子 2007 食育 日本食品科学工学会誌 **54**(4), 204.
- Machovar, K. 1949 Personality Projection in the Drawing of the Human Figure, Charles C Thomas.
- 内閣府食育推進 HP 2007 内閣府 <<http://www8.cao.go.jp/syokuiku/index.html>> (2010.10.04).
- 内閣府食育推進室 2005 パンフレット「食育の推進に向けて～食育基本法が制定されました～」<<http://www8.cao.go.jp/syokuiku/data/pamph/index.html>> (2010.10.04).
- 岡本洋子・田口田鶴子 1996 こども期の食事がその後の味覚感受性や性格特性に及ぼす影響 日本家政学会誌 **48**(7), 621-631.
- 鈴木淳子 2002 調査的面接の技法 ナカニシヤ出版
- Sira, N. & White, C. P. 2010 Individual and Familial Correlates of Body Satisfaction in Male and Female College Students. *Journal of American College Health* **58**(6), 507-514.
- Swensen, C. H. 1968 Empirical evaluations of human figure drawings. *Psychological Bulletin*, **70**(1), 20-44.

(受稿: 2011.2.25; 受理: 2011.12.26)